

オーケストラ

岩野 裕一

2024年2月6日、わが国が生んだ最大の世界的指揮者だった小澤征爾が、88歳の生涯を閉じた。2010年に食道がんが見つかって以降、次々と病魔に襲われてその後の指揮活動は困難を極めたが、最後まで音楽への意欲を失わず、毎年夏のセイジ・オザワ松本フェスティバル(OMF)でも必ず会場に姿を見せていた。

小澤の逝去を受けて、かつてポストを持っていたNHK交響楽団や日本フィルハーモニー交響楽団を含め、内外の楽団は相次いで追悼の談話をSNS上で発表。水戸芸術館での「お別れ会」(5月26日)では水戸室内管弦楽団が、OMFの特別イベント「小澤征爾総監督 感謝の会—その生涯を祝福して—」(8月17日)ではサイトウ・キネン・オーケストラ(SKO)がそれぞれ献奏を行なったほか、新日本フィルハーモニー交響楽団は8月31日に「追悼演奏会」を開催して、不世出のマエストロの死を悼んだ。

また、小澤の逝去が発表された2月9日午後7時には、サントリーホールで読売日本交響楽団が山田和樹指揮による定期演奏会を行っていたが、奇しくも小澤が世界初演した武満徹の「ノヴェンバー・ステップス」が演目に組まれており、訃報を伝える山田のスピーチののち演奏が捧げられた。

精神的支柱を失ったSKOは、夏のOMFに出演予定のアンドリス・ネルソンスが直前にキャンセルするというアクシデントにも見舞われたが、今年からOMF首席客演指揮者に抜擢された沖澤のどかが代役をつとめ、ブラームスの交響曲第1番・第2番で胸のすくような快演を聴かせたのは、一筋の光明であった(8月)。

2024年12月をもって引退した指揮者・井上道義の、1年間にわたる超人的な活躍も特筆すべきだろう。オペラ「ラ・ボエーム」(7都市8公演)を含め、17楽団を指揮した計41公演の中でも、大阪フィルハーモニー交響楽団とのショスタコーヴィチ交響曲第13番「バビ・ヤール」(2月)、オーケストラ・アンサンブル金沢との同14番(11月)と、最終公演となった12月30日のサントリー音楽賞受賞記念コンサートで読響から引き出した究極の響きは忘れ難い。

名古屋で3楽団が本拠としていたしらかわホールが、2月末をもって閉館したのは衝撃的な出来事だったが、明るい話題としては、6月の公益社団法人日本オーケストラ連盟総会で準会員の富士山静岡交響楽団、中部フィルハーモニー交響楽団が正会員として承認。静響は首席指揮者高関健による大曲ブルックナー8番(2月)、中部フィルは首席指揮者秋山和慶による北欧シリーズ(6, 9, 11月)が大きな成果を挙げた。名実ともにわが国を代表する巨匠となった秋山は、指揮者生活60周年の節目を迎え、最も深い関係を保つ東京交響楽団と9月の記念定期をブルックナーの4番で祝い、12月31日には恒例のMUZAジルベスターコンサート2024で締めくくった。

創立70周年を迎えた九州交響楽団は、2023年度末で音楽監督を勇退する小泉和裕(4月から終身名誉指揮者)が、監督として最後の3月定期と20年ぶりとなる東京公演でR・シュトラウス「英雄の生涯」を披露、有終の美を飾った。4月からは弱冠29歳の太田弦が首席指揮者に就任して、11月定期では小出稚子「博多ラブソディ」の再演と石井真木「モノプリズム」という意欲的な演目で気を吐いている。

2024年はブルックナーの生誕200年にあたり、朝比奈隆の伝統を汲む大阪フィルは、音楽監督の尾高忠明が1月の6番を皮切りに、9番、0番、2番、1番、8番を集中的に演奏した。東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団は、常任指揮者の高関健が9月定期の第8番第1稿で楽団の好調ぶりをアピール。東京都交響楽団とエリアフ・インバ

ルの第9番4楽章版は、賛否両論の話題を呼んだ(6月)。広島交響楽団は下野竜也が3月末で音楽総監督を退任する際、7年前の就任披露で演奏した第8番を特別定期と東京公演で公約通り再演して、後任の音楽監督クリスティアン・アルミンクにバトンを受け継いだ。

その他の動きに目を向けると、札幌交響楽団は2025年4月から首席指揮者に就任するエリマス・グランディが、11・12月定期のマーラー「巨人」でエネルギー溢る響きを引き出した。ロゴマークを一新した仙台フィルは、バンダイナムコグループ3社をパートナーにしたエンターテインメント定期(5, 8月)を開始するなど、攻めの姿勢を見せる。山形交響楽団は、91歳の創立名誉指揮者、村川千秋がオール・シベリウスの特別演奏会(8月)で圧倒的な感動を呼んだほか、常任指揮者阪哲朗の演奏会形式オペラシリーズ第2弾となる「椿姫」(1月)も、見事な成果を挙げている。

在京オーケストラでは、N響が2年ぶりに97歳のヘルベルト・プロムシュテットを迎え、10月定期の3プログラムは全てが感動的な名演となった。東京フィルハーモニー交響楽団とチョン・ミョンフンによるヴェルディ「マクベス」(9月)、東響とジョナサン・ノットによるR・シュトラウス「ばらの騎士」(12月)は、いずれも3年越しのオペラシリーズの大団円にふさわしい充実した演奏となった。

読響は、10月に常任指揮者セバスティアン・ヴァイグレと9年ぶりのヨーロッパ公演を取行。首席客演指揮者に就任したユライ・ヴァルチュハは5月定期に登場してマーラー3番で相性の良さを示した。日本フィルは首席指揮者カーチン・ウォンが大曲マーラー9番(5月)、ブルックナー9番(9月)で楽団の能力を引き出し、パシフィック・フィルハーモニア東京は、音楽監督の飯森範親がフェルディナント・リースの交響曲全曲演奏を開始、2月に1番、7月に2番を日本初演した。

神奈川フィルハーモニー管弦楽団は、團伊玖磨の生誕100周年を記念した歌劇「夕鶴」(4月)や、第400回記念定期公演でのヴェルディ「レクイエム」(10月)で、オペラの経験豊かな音楽監督沼尻竜典の強みを発揮。千葉交響楽団は、音楽監督山下一史の十八番であるニールセンの交響曲第2番「4つの気質」を10月定期で取り上げて、存在をアピールした。

名古屋フィルハーモニー交響楽団は、9月の名曲シリーズに登場した初来日のドイツ在住、八嶋恵利奈がマーラー「巨人」で鮮烈に日本デビュー。セントラル愛知交響楽団は角田剛亮が4月から音楽監督に昇任、アーサー・ブリスの「色彩交響曲」をメインにした英国プロ(9月)が注目を集めた。

日本センチュリー交響楽団は、2025年度から久石譲の音楽監督就任を発表。10月定期ではライヒとシューマン2番というこだわりのプログラムで満員の聴衆を集めた。大阪交響楽団はミュージックパートナーの柴田真都が今年もオペラに取り組み、ラヴェル「子供と呪文」(2月)で成果を挙げたほか、前年に逝去した飯守泰次郎の代役として関西フィルハーモニー管弦楽団の3月定期に登場した小林研一郎が、渾身のスマタナ「わが祖国」全曲で聴衆の感動を呼んだ。

兵庫芸術文化センター管弦楽団は、県政の混乱をよそに、佐渡裕芸術監督のもとコンサート、オペラの両面で盤石な活動を続け、神戸市室内管弦楽団は、姉妹団体である神戸市混声合唱団とともに神戸文化ホール開館50周年記念のヴェルディ「ファルスタッフ」に出演(12月)、佐藤正浩指揮のもと目ざましい成果を挙げた。

岩野裕一(いわの・ゆういち)

音楽評論家、株式会社実業之日本社代表取締役社長。1964年、東京生まれ。上智大学大学院文学研究科博士前期課程修了(新聞学専攻)。著書に『王道楽土の交響楽 満洲一知られざる音楽史』(第10回出光音楽賞)、『日本のピアノ100年』(前関孝則氏との共著、第18回ヨゼフ・ロゲンドルフ賞)、『朝比奈隆 すべては交響楽のために』など。(公財)アフィニス文化財団オーケストラ専門委員、(公財)日本音楽財団評議員。